分科会Ｅ

11月12日（木）９：15～12：25／大ホール

座　長　株式会社さくら苑　代表取締役　重永　啓輔　氏

座　長　株式会社エムズ　代表取締役　森本　浩史　氏

テーマ１：人材確保・行政支援策、人材育成・定着、業務改善・環境改善、生産性向上（ICT、ロボット）、物価上昇・高騰対策 等

テーマ３：グループホームケア、パーソン・センタード・ケア、自立支援、自己決定支援、フレイル予防 等

時間	演題 / 副題	所　属	発表者（都道府県）
9：15 〜	笑顔を取り戻す ピンチをチャンスに	グループホーム モン・サンあぜかり	田中　英知 （長崎県）
9：25 〜	令和８年はグループホーム運営の大転換点 〜生産性向上とグループホームケアの両立を目指して〜	アライヴ株式会社 グループホームあいむ	奥田　　寛 （大阪府）
9：35 〜	離職率０％辞めない組織には理由がある 外国人・新卒が定着する仕組みづくり	グループホーム円頓寺	伊東　小波 （愛知県）
9：45〜　発表①〜③　質疑応答（５分間）			
9：50 〜	BPSDはSOSのサイン 日本版BPSDケアプログラムの実践事例	グループホーム　ジョイフル布袋	小林　里美 （愛知県）
10：00 〜	認知症の人は財布はいらない？ ー財布に本物の1万円札を入れて所有ー1年半の実践から見えた新たなグループホームの視点	グループホーム　はまど	打樋　聡美 （徳島県）
10：10 〜	帰宅願望発動スイッチと解除キーを探せ！ 安心して暮らしていただくために	グループホーム　あゆみの郷	飯沼　有希 （兵庫県）
10：20〜　発表④〜⑥　質疑応答（５分間）			
10：25 〜	背景を探る個別ケアの取り組み 自己表現と役割	グループホーム フロイデグループホーム桂	和田　　裕 （茨城県）
10：35 〜	『あれ・これ・それ』で話される方との関わり方 〜指示語の奥にある想いを理解する支援〜	グループホームふれあい大久保南	長谷川　毅 （兵庫県）
10：45 〜	なんも変わっとらん。だいじょうびぃ〜 本来の優しさ・魅力を引き出したい	グループホーム府中みどり園	濱本　佳奈 （広島県）
10：55〜　発表⑦〜⑨　質疑応答（５分間）			
11：00 〜	自分の足でもう一度歩きたい 〜願いを叶える自立支援〜	グループホーム　まんてん塩津	堀　　真也 （滋賀県）
11：10 〜	腸活でチョー良い暮らし 〜チームワークと根拠ある介護の実践〜	グループホームよつ葉	塚田みゆき （茨城県）
11：20 〜	一人一人に寄り添い、その人らしい時間を共に 〜やりがい・生きがいをもち、最期まで自分らしい暮らしを支える〜	有限会社みんなの家 グループホームみんなの家錦織	岩渕　明菜 （宮城県）
11：30〜　発表⑩〜⑫　質疑応答（５分間）			
11：35 〜	緊急ショートステイから学んだレスパイトケア 〜南風でできることを考えてみた〜	認知症グループホーム南風	岡田　朋香 （東京都）
11：45 〜	穏やかな暮らしを支える『役割』 洗濯物たたみという仕事との出逢い	グループホーム ハートハウスもいわした	田中　賢一 （北海道）
11：55〜　発表⑬〜⑭　質疑応答（５分間）			
12：00 〜	認知症との関わりから笑顔を引き出す その人らしさを大切にしたケアの実践	グループホームらんまん高殿	坂下　　瞳 （大阪府）
12：10 〜	ストレスを軽減する環境づくり 〜認知症ケアにおける環境整備の大切さ〜	グループホーム　園	髙木　龍輝 （埼玉県）
12：20〜　発表⑮〜⑯　質疑応答（５分間）			
総　評			

演題番号
Ｅ－①

笑顔を取り戻す

ピンチをチャンスに

◆キーワード
1　人材不足
2　理念の未達成
3　関りを大切に

長崎県・長崎市　グループホーム　モン・サンあぜかり（もん・さんあぜかり）

発表者：管理者　田中　英知（たなか　ひでつぐ）

3フロアの定員」27名ではあるが現在は1フロア休止にし、18名の入居者様と過ごしている。	「cool life together～めざせ110歳」を理念に日々過ごしています。

（取り組んだ課題・はじめに）
人材不足が続いており、職員は弱音を吐く事があり疲弊もしていた。それでも27名の入居者様に対し一生懸命支援を行っていた。しかし法人の理念である「cool life together～めざせ110歳」を達成できないと感じR7.7月より人材不足により3フロアで稼働していたのを1フロア休止にして2フロアで稼働する様になる。①気持ちにゆとりがある勤務表作り②入居者様のケアの見直し③レクリエーション活動。④職員の質の向上。この4つを1からやり直す事にする。

（倫理的配慮）
発表に当たり、個人の特定が出来ない様 配慮し本人・御家族には了承を得た。

（具体的な取り組み）
①今までは2名の介護職員+介護補助(週2.3回)だった体制が3.4名の介護職員+介護補助(週2.3回)の勤務体制となり、急な休みがあっても直ぐに対応出来る、ゆとりがある勤務表づくりをしている。職員が体調不良等で休む際「職員が居ないのに…」と強く思う事がない状態になっている。②法人で取り組んでいる「健康長寿日本一」の一環で協力病院のPTが施設を訪問しその方にあったリハビリメニューを考えてもらい実施している。③1日の空いた時間で創作物、カラオケ、風船バレー、おやつ会、また日程を決めたBBQ、ピクニックを開催している。④各委員会の中で研修や勉強会を盛り込んでいき職員一人一人が考える、意見を言う場にしている。全職員に共有することで対応も同じに様に出来る組織作りをしている。また外国人雇用に対して消極的ではあったが、R7.11月からミャンマー2名を採用しているが、法人の新人教育マニュアルを参考にし、また人事課長が日々気掛けていてくれる事もあり法人・事業所の間に隙間がなくなっている。

（活動の成果と評価）
職員にゆとりがある事により疲弊した表情ではなく笑顔が増え、入居者様の笑顔を引き出す事も増えている。入居者様から甘い物を食べたいと声があればおやつ会を実施し、外に行きたいと声が上がればお弁当を作って法人のバスに乗ってピクニックに出掛けています。歌が好きな人はカラオケを楽しみ、もっと元気になりたい方は、PT指導のリハビリを行ない車椅子から歩行器歩行まで回復し本人、ご家族も涙を流し喜ばれていました。今年の3月からは玄関に創作物を1年間通して飾る事を目標とし季節に合った塗り絵、貼り絵を日々行っています。「うわーまたきた」と言われる入居者様(職員も含め)もいますが、出来上がって一緒に飾る時は「そっちがいいんじゃない」とアドバイスをくれています。職員が関わる時間が増えた事でメリハリある生活を過ごす事が出来ています。また医療連携看護師より「最近怪我等の処置もなく入居者様が落ち着いていますね」と言葉があり、職員体制が充実する事で安心安全に暮らせていると実感できています。
1フロアを休止する事で収入は大幅に下がってしまいますが「職員⇔入居者」この関係があり成り立っていると改めて感じています。

（今後の課題・考察・まとめ）
待機者が沢山いますので、1日でも早く休止を解き3フロアで稼働したいと考えています。その為には新人職員の採用、教育により力を入れて行かないといけません。今いる職員が年齢を重ねても働ける組織作り、また年齢を重ねた職員が多数いるので、退職されても新たな人材をしっかり育て定年65歳もしくは65歳以降でも再雇用が出来る働きやすい職場を作らないといけないと思っています。特定技能性を夜勤できるまでに育てたのは大きなプラスである為、それを活かしながら指導を行っていきます。収入減はピンチですが職員のモチベーションアップがプラスになるので、プラスを伸ばしながら日々過ごします。
（参考・文献など）なし

演題番号
Ｅ－②

令和８年はグループホーム運営の大転換点

～ 生産性向上とグループホームケアの両立を目指して ～

◆キーワード
1　生産性向上
2　グループホームケア
3　業務改善

大阪市・住吉区　　アライヴ株式会社　グループホームあいむ

発表者：代表取締役・奥田（おくだ）　寛（ひろし）　　共同研究者：常勤マネージャー職員

平成 16 年 10 月開設。今年で開設 23 年目。 3 ユニット 27 名。平均年齢 85 歳、平均介護度 2.3 大阪市南部の閑静な住宅街の中にある。常勤職員 11 名、非常勤介護職員 15 名、生活支援職員 20 名の体制	グループホーム　基本理念標語 「わたしも　みんなも　一緒に楽しい生活」 共同生活の強みを活かした自立支援に取り組んでいる

（取り組んだ課題・はじめに）

令和８年６月からの新たな介護職員等処遇改善加算の上位区分取得において、施設系では「生産性向上推進体制加算」の取得が、居宅系（共用デイ・ショートステイ）では「ケアプランデータ連携システム」への取組みが条件となった。

更には「介護情報基盤」の運用も始まっており、「寄添い自立支援型グループホームケア」とは、次元が異なる運営への転換の感がある。当初は乗り気ではなかったが、2040 年問題を含めて熟考の末に、厚労省指導の取り組みを行うことに決定した。その過程とポイントについて報告させていただきます。

（倫理的配慮）

今回の発表についての資料・写真等は、ご本人・ご家族、その他関係者の了解を得ています。

（具体的な取り組み）

令和８年６月からの新処遇改善加算は「生産性向上を条件とした賃上げ」であり、グループホームあいむでは、旧：処遇改善加算Ⅱ → 新：処遇改善加算Ⅱ（ロ）への移行で、＋4.2%の加算増となる。年間 380 万円、常勤換算一人当たり月額 13,500 円の賃上げ原資となる。

処遇改善加算Ⅱ（ロ）取得のためには、①介護テクノロジー1 種類の導入、②生産性向上委員会開催＝業務改善取組み活動、が条件となる。

令和６年４月報酬改定時は、「生産性向上推進体制加算（Ⅱ）」10 単位では、業務増の割に合わないと見送った。しかし思い返すと、ＧＨ内でのインカム使用や生産性向上の文言等に対し、主観的スタンスから拒否していた感がある。さらに、当事業所は介護ソフトが未導入なのだが、「現状で問題なし」「非常勤職員に年配女性職員が多く使用できるか？」との保守的な考え方によるものであった。

そして２年後、令和８年春頃から厚労省の方針を客観的スタンスで検討・協議を行うと、当事業所では既に実行済みの部分が多々あったことに気づいた。

具体的には、①介護テクノロジーは、経済産業省認定介護ロボット（見守り機器）を、10 年前から順次導入しており、以来、夜間の守り神的存在である。②職場環境要件＝業務仕分け・業務分担の可視化は実行済み。現場職員配置及び業務のムリ・ムダ・ムラ軽減について月例会議で検討しており、あいむにおいて生産性向上はこの部分では達成されていた。

（活動の成果と評価）

更なるＩＣＴ化を目指すに当たり、生産性向上とグループホームケアの両立が可能であるか？主客転倒にならぬ様に、再確認する必要があると考えた。

グループホームケアの基本は地域密着サービスの事業の基準 89 条に記された、①共同生活住居、②家庭的な環境、③地域住民との交流、④能力に応じ自立した日常生活、の４要素である。これらが、導入予定の「記録関係、文書作成関係のＩＣＴ化」により、損なわれることはないか？を話し合った。

①利用者さん達の生活は共同生活介護として、リズムが確立されている。⇒介護記録用紙は記入内容が標準化されている＝タブレット入力に移行が容易、利用者さん達の生活内容をそのまま記録出来る。

②職員の業務については標準化、作業分担がなされており、認知症ケアについても変更なく移行可能。

（今後の課題・考察・まとめ）

現場運営で従来から変化することは、記録：紙⇒タブレット（基本はテンプレート一括入力＋音声入力）。加えて、見守り機器と連動させて、「異常検知」→自動記録 も出来るので、生産性向上に繋がる。

最たる課題としては、「介護ソフト機器の操作にまず常勤職員が慣れてマスターすること」、そして「非常勤職員への指導」が考えられるが、根気強く行っていくことでクリアできるであろう。

説明会でも成功の可否のポイントは、現場と一緒に進めるための組織運営が出来ているか？そして、「職場環境要件＝業務仕分け・業務分担可視化」を行えているかが重要とのことだったが、同感である。

加えて文書の生産性向上を図り、最近増加した加算の研修・報告書への時間削減対応も必要である。

演題番号
Ｅ－③

離職率 0%辞めない組織には理由がある

外国人・新卒が定着する仕組みづくり

◆キーワード
1　人材定着
2　人材育成
3　人材確保

愛知県・名古屋市　グループホーム円頓寺（えんどうじ）

発表者：サブマネジャー　伊東小波（いとうこなみ）　　共同研究者：管理者　山屋まみ（やまやまみ）

認知症対応型共同生活介護（グループホーム）として、家庭的な環境で認知症高齢者の尊厳を尊重し、その人らしい生活の継続を支援している。	認知症高齢者が少人数で共同生活を送りながら、日常生活支援や健康管理、認知症ケアを受けられるサービスを提供している。

（取り組んだ課題・はじめに）
近年、採用市場の厳しさから必要な人材を確保することが難しくなり、人員不足を補うため派遣職員へ依存する状況が続いていた。その結果、人件費が高騰するとともに、派遣職員の契約終了などによって現場では慢性的な人員不足が発生した。不足した人員の負担は既存職員に集中し、業務負担の増加による疲弊から離職につながるケースも増え、人材不足がさらに深刻化する悪循環に陥っていた。この状況を改善し、安定した人員体制を構築することが喫緊の課題となっていた。
（倫理的配慮）
本取り組みにあたり、職員および利用者の個人情報保護に配慮し、個人が特定されない形でデータを取り扱った。また、職員への不利益が生じないよう配慮しながら実施した。発表にあたっては、施設名や個人が特定される情報は匿名化し、個人情報保護に十分配慮した。
（具体的な取り組み）
人材不足を解消するため、中途採用に依存するのではなく、**技能実習生・特定技能外国人・留学生**および**新卒採用**を積極的に推進した。採用だけでなく、一人ひとりが安心して働き、早期に戦力となるための育成体制の構築にも取り組んだ。外国人職員に対しては、日本の文化や生活習慣、職場のルールなど、仕事以外の生活面も含めた支援を実施した。また、週 1 回の日本語研修を行うとともに、3 か月で基本業務を習得できる 0JT 研修、6 か月で夜勤業務を担えるよう段階的な育成プログラムを整備した。新卒職員に対しては、介護技術だけでなく、社会人としての基礎を身につけることを目的に、入社後 1 か月半の新人研修を実施した。さらに、月 1 回のメンター制度を導入し、不安や悩みを相談できる環境を整えた。また、外国人職員・新卒職員ともに、管理者による月 2 回の定期面談を実施し、業務の習得状況や精神面を継続的にフォローした。コミュニケーション能力やチームワークの向上を目的として「挨拶ナンバー1 王座決定戦」を開催し、職場全体で挨拶や声掛けを意識する風土づくりにも取り組んだ。さらに、インターフォンの応対方法から介護技術まで、実際の動きを視覚的に学べるショート動画マニュアルを作成し、言葉だけでは伝わりにくい内容をいつでも繰り返し学習できる環境を整備した。これにより、教育内容の標準化と早期戦力化を図った。
（活動の成果と評価）
本取り組みの結果、「離職率 0%」を達成し、人材の定着という大きな成果につながった。また、グループホームを人材育成の拠点と位置付け、育成後は給与水準の高い施設へ異動できるキャリアパスを構築したことで、職員のモチベーション向上と法人全体の人材確保につながった。さらに、育成体制が整備されたことで、新たな技能実習生・特定技能外国人・留学生や新卒職員を継続的に受け入れることが可能となり、「採用・育成・定着・次世代の採用」へとつながる好循環を生み出すことができた。これらの取り組みにより、人員不足の改善だけでなく、教育の標準化や職員が安心して成長できる職場環境の整備にもつながり、持続可能な人材育成体制を構築することができた。
（今後の課題・考察・まとめ）
今回の取り組みにより、離職率 0%を達成し、人材の採用・育成・定着の仕組みを構築することができた。一方で、人材不足が続く介護業界においては、一時的な成果で終わらせることなく、継続的に人材を確保・育成できる体制を維持していくことが今後の課題である。
特に、外国人職員や新卒職員が長く安心して働き続けられるよう、日本語教育やキャリア形成支援、働きやすい職場環境づくりをさらに充実させる必要がある。また、教育体制やマニュアルを継続的に見直し、職員一人ひとりの成長に応じた支援を行うことで、介護の質の向上にもつなげていきたい。今回の実践を通して、人材不足への対応は「採用」だけでは解決できず、「育成」と「定着」を一体的に進めることが重要であると実感した。今後も職員が安心して働き、成長できる職場づくりを継続するとともに、持続可能な人材育成モデルとして発展させ、利用者に質の高い介護サービスを提供できる組織を目指していきたい。

演題番号
Ｅ－④

BPSD は SOS のサイン

日本版 BPSD ケアプログラムの実践事例

◆キーワード
1　BPSD ケアプログラム
2　アンメットニーズ
3　科学的介護

愛知県・江南市　グループホーム　ジョイフル布袋（ほてい）

発表者：介護職　小林（こばやし） 里美（さとみ）　　共同研究者：　猿渡（さわたり） 寛美（ひろみ）

特養、ショートステイ、デイサービス、居宅介護支援事業所を併設し、在宅から入所までトータルサポートする地域の拠点	1 ユニット 9 名　女性 6 名　男性 3 名 平均介護度 1.25　平均年齢 87 歳

（取り組んだ課題・はじめに）
【事例：A 様】
93 歳女性。アルツハイマー型認知症、うつ病、慢性関節リウマチ、甲状腺機能低下症、狭心症、脊柱管狭窄症の既往を持つ。認知症高齢者の日常生活自立度Ⅲa、障害高齢者の日常生活自立度 A2、HDS-R14 点。
【生活歴および背景】
夫の逝去後ケアハウスへ入所されたが、コロナ禍により外出や他者との接触が激減。それに伴い物忘れや物盗られ妄想、抑うつ状態が出現し、2022 年 10 月に当グループホームへ入所された。
【課題】
2026 年 2 月頃より物盗られ妄想の出現頻度が再び増加し、同時に抑うつ状態も激しくなった。単なる症状の抑制ではなく、行動の裏にある「本人の SOS のサイン」を正しく評価・介入するため、日本版 BPSD ケアプログラムを用いた 4 ステップ展開によるアプローチを試みた。

（倫理的配慮）
利用者様本人及びそのご家族に発表の趣旨を説明し、同意を得た

（具体的な取り組み）
日本版 BPSD ケアプログラムに基づき、本人の状態に合わせてケアアプローチを「物理的」「対人」「生きがい」の 3 期に分けて段階的に展開した。
【第 1 期】物理的環境（室温）へのアプローチ
A 様は暑さによる不快感が常同行動の原因と考えられ、室温調整により行動が減少し、「暑い・寒い」を伝えられる強みが確認された。
【第 2 期】対人環境（人間関係）へのアプローチ
A 様は B 様への苦手意識から共同空間で気分の落ち込みが続いていた。座席配置を見直し対人刺激を減らしたことで、緊張や気分低下が緩和された。
【第 3 期】生きがい・役割へのアプローチ
裁縫の得意さを生かした役割づくりを日課化したことで、A 様の抑うつ状態が改善し、ふさぎ込む行動が消失した。

（活動の成果と評価）
共通の評価指標である「BPSD25Q」を用いて定期的に数値評価を行い、状態改善プロセスを客観的・定量的に可視化しました 。

	BPSD25Q	状態変化
初回	31 点	物盗られ妄想、常同行動、うつ状態が顕著
第 2 回	24 点	身体的不快感が除かれ常同行動が減少
第 3 回	17 点	苦手な刺激が遠ざかり気分の落ち込みが目に見えて減少
第 4 回	13 点	役割・生きがいの獲得により、スコアは初回の半分以下へ軽減

BPSD の軽減に伴い、職員の対応への困難さや負担感も軽減され、より質の高いケアを提供する好循環が生まれました 。

（今後の課題・考察・まとめ）
【考察①：ニーズの階層性と段階的充足】
BPSD の改善には、アプローチの順序が重要であることが再確認された。物理的な不快感（第 1 期）を解決した上で、対人関係の安心（第 2 期）を創出し、最後に自己実現や役割（第 3 期）を満たすという「段階的な充足」が、心身の安定に効果的に働いたと考えられる。
【考察②：チームケアと本人の「強み」の活用】
単一の関わりではなく、多職種で評価・アプローチを統一したこと、また A 様の「強み」に焦点を当てたケアを展開できたことが、大幅な点数減少と QOL 向上につながった。
【まとめと今後の課題】
BPSD を問題行動として排除するのではなく、本人が発している「SOS のサイン」として捉える視点がチーム全体に定着した。今後は状態の変化に応じたアセスメントの継続と、ケアの質の標準化が課題である。
（参考・文献など）

認知症チームケア推進研修テキスト

演題番号
Ｅ－⑤

認知症の人は財布はいらない？

―財布に本物の1万円札を入れて所有―1年半の実践から見えた新たなグループホームの視点

◆キーワード
1　お金への心配や不安
2　自尊心の保持
3　ひとりの人

徳島県・小松島市　グループホーム　はまど

発表者：打樋（うちび）　聡美（さとみ）

共同研究者：山下（やました）　知子（ともこ）

徳島県小松島市に位置する、開設は2020年、定員は2ユニット18名。海沿いの穏やかな環境の中にあり、24時間体制で共同生活の支援を行っている。	地域とのつながり大切にし、居心地のよい空間で、❝笑いのある生活❞を理念に掲げている。残存機能の維持を図りながら、一人の人間としての尊厳に伴走するサービス提供に注力している。

（取り組んだ課題・はじめに）

グループホームにおける認知症高齢者のお金の心配や不安に対し、施設管理の利便性や紛失リスクの排除、あるいは組織やスタッフを守ることを最優先し、一律で制限・管理する手法を選択しがちになる。更に、管理できるわけがないという認識や「お金を使う場所がない」という理由を、ケア提供者側が納得の材料にし続けている傾向にもある。しかし、この方法は本人の社会的アイデンティティを奪い、落ち着かない行動などケアの悪循環を生む危険性がある。

アルツハイマー型認知症に罹患し、認知症の程度は中等度のA氏は、記憶障害や即時記憶の低下、見当識障害を有し、「ぼけてしまった」と曖昧になる現実に葛藤が毎日のようにみられていた。更に、夕方になると「年金で足りているか」「借金はないか」とお金の心配や不安を繰り返す状態が強くみられた。

そこで、かつて大黒柱として家庭を支えてきたA氏の自尊心保持への関わりとして、本人・家族と相談し、本人が安心できると思われる現物のお金（本物の1万円札）を財布に入れて保持してもらう『財布ケア』を1年半にわたり計画・開始した。

（倫理的配慮）

発表にあたり、本人・家族へ本取り組みの趣旨を説明し、同意を得た。

（具体的な取り組み）

対象： 中等度認知症のA氏（80歳代男性）。元一家の大黒柱であり、身体機能は維持されているものの、お金への心配や不安が非常に強い。即時記憶低下・理解判断力低下があり、言葉による説明を繰り返すほどに混乱し、焦燥感が強くなる特性があった。妻と長男による毎週の面会がある。

内容： レプリカではなく、本人・家族と相談のうえで「本物の1万円札を入れた本物の財布」を常時携帯してもらった。お金の心配や不安に対しては丁寧に傾聴し、本人の不安に対しては字で示し視覚的に伝えた。評価方法:DBD13による点数の変化と、本人の発言や具体的な行動の様子からその内面を読み解くアセスメントを組み合わせて評価した。

（活動の成果と評価）

DBD13の合計点数においては、1年半の経過の中で劇的な数値の減少（改善）は見られず、お金の心配や不安を抱く「回数（量）」自体にも変化はなかった。しかし、本人の行動の「質」においては、以下の極めて重要な変容が観察された。A氏は他者の目に触れない時間にも、ホール等で一人、財布を開け、中身を確認する作業を1日に何度も繰り返していた。言葉による他者の説得は、即時記憶障害により数分で消失し、混乱を深めるだけであった。しかし、この「自ら財布を開け、本物の1万円を目と手で確認し、閉じる」というわずか「5秒の確認作業」は、直前の安心した記憶が消失してしまう記憶障害に対し、その都度、視覚と触覚による確証をもたらした。これにより、人から言われて納得するのではなく、自分で確かめて安心することで次の日常生活動作（夕食や睡眠）へのスムーズな切り替えが可能となった。

（今後の課題・考察・まとめ）

本事例における1年半の『財布ケア』は、DBD評価では「BPSDが改善していない」となるが、「5秒の確認作業」を通じて、お金の所持を認識できる時間が生じ、一瞬でも安心し落ち着いて過ごす時間を持つことができた。更に、日常のQOLに着目すると「5秒の確認作業」により自ら納得されたからこそ、美味しくご飯を食べ、穏やかに眠り、スタッフと笑顔で過ごすことができた。これは、本人の尊厳保持およびQOL向上につながったからこそであり、有効なケアであると考えられる。

また、これらの状況を家族とも共有し、家族もケアの一員として協働していくことが大切だと考える。更に、本人の認知症の程度や暮らしの中での変化を適切に把握しながら、「財布からの卒業」へ移行するプロセスを、本人・家族と協働し共有していくことが今後の課題であると考えている。

演題番号
Ｅ－⑥

帰宅願望発動スイッチと解除キーを探せ！

安心して暮らしていただくために

◆キーワード
1　ｸﾞﾙｰﾌﾟﾎｰﾑｹｱ
2　ﾊﾟｰｿﾝ・ｾﾝﾀｰﾄﾞ・ｹｱ
3　自立支援

兵庫県・丹波市　グループホーム　あゆみの郷（さと）

発表者：管理者　飯沼（いいぬま）　有希（ゆうき）

認知症対応型共同生活介護 2017 年４月開設 定員９名	法人理念「地域に根ざした誠実でよりよい医療・介護の実践　」

（取り組んだ課題・はじめに）
独居で生活されていた方がグループホーム（ＧＨ）へ入居されると、環境の変化により帰宅願望などの周辺症状（ＢＰＳＤ）が強く出現することがある。その際、職員はご本人の「帰りたい」という思いにどのように寄り添い、どのような「安心」を提供すればよいのかが課題となる。
そこで、帰宅願望へ至る心理的変化の「スイッチ」は何か、また、不穏を未然に防ぎ、安心につなげる「解除キー」（不安の解決、または関心を他へ向ける方法）はあるのかを明らかにすることを目的とし、対象者の行動分析を行った。

（倫理的配慮）
発表に際し、ご家族に研究の趣旨を説明し、承諾を得ている。

（具体的な取り組み）
対象：A氏（81 歳、女性、要介護 3、アルツハイマー型認知症、入居前は独居）。
Ａ氏は 2 年前に認知症と診断され、転倒による入院を経てＧＨへ入居された。入居当初より帰宅願望が強く、出口の探索や他居室への入室が見られた。入居 3 か月経過後も立ち歩きが継続していたため、安心できる環境づくりを目的に、以下の 2 段階（各 2 週間）のモニタリングと分析を行った。

記録１）行動とタイミングの分析：「いつ」「どのような言動をされたか」を記録した。
家族の面会日の前後や入浴日、特定の職員、時間帯などによる行動の偏りを確認するため行動把握を行った。

記録２）因果関係の分析：記録１）を踏まえ、帰宅願望（立ち歩き）が起きる「きっかけ（原因）」、それに対する職員の「対応」、その後の「結果」を記録した。事前に帰宅願望が高まる兆候を察知するとともに、不安な気持ちを他に向けるための具体的なアプローチを模索した。

（活動の成果と評価）
記録１）の分析では、食後に「お金がない」「カバンはどこ？」といった訴えが多くみられた。生活歴から、以前は喫茶店を頻繁に利用されており、当ホームを喫茶店だと認識されている可能性があると分析した。そのため、支払いをしたいが、手持ちがないため「不安」が生じ帰宅願望へつながっていると推察した。
記録２）では、その不安を解消する声かけとして「支払いの必要はないこと」を伝えた。具体的には「息子さんが支払ってくれている」と伝えると落ち着かれることが多かった。また、テーブル拭きなどのお手伝いをお願いしたが効果は乏しかった。しかし、色ストローの仕分けなどの手作業には集中して取り組まれた。過去に梱包の仕事をされていた経験からか、ストローを輪ゴムでまとめる作業には非常に熱心であった。

（今後の課題・考察・まとめ）
本研究の着想は、植賀寿夫（著）『認知症の人のイライラが消える接し方』で紹介されている「普通に近づくと激怒される入居者に対して、目の前で床を拭いてゴミを捨てる動作（演技）を見せることで感謝の気持ちが芽生え、スムーズに目的のケアを受け入れてもらえた」というエピソードに由来する。A氏にもA氏だけの心理的トリガーがあるのではないかと考えたのが始まりである。
その結果、A氏の帰宅願望のスイッチは「支払いができない」という『不安』であり、その解除キーは「息子が支払っているという説明」と「慣れ親しんだ手仕事」によって得られる『安心』であるとわかった。本事例を通し、職員が入居者の生活歴から不安の本質を見抜き、個別の安心を提供することこそが、周辺症状の軽減・予防とその人らしい暮らしの支援に繋がると考えられた。

（参考・文献など）

植賀寿夫（著）『認知症の人のイライラが消える接し方』講談社

演題番号
Ｅ－⑦

背景を探る個別ケアの取り組み

自己表現と役割

◆キーワード
1　グループホームケア
2　パーソンセンタードケア
3　自己決定支援

茨城県・城里町　グループホーム　フロイデグループホーム桂（かつら）

発表者：和田（わだ）　裕（ゆたか）

フロイデグループホーム桂は県都水戸市に隣接し、人口約 16272 人、高齢化率 42.3%の茨城県東茨城郡城里町に 2003 年７月に開設いたしました。	社会福祉法人博友会は、地域の皆様が住み慣れた場所で、いつまでも安心して暮らし続けることを目指し、高齢者福祉をはじめ、障害福祉、児童福祉など、地域のニーズに応じた幅広い福祉サービスを運営しております。 2003 年に７月に開設された、当法人として最初の認知症対応型グループホームです。

（取り組んだ課題・はじめに）
対象者はアルツハイマー型認知症のある入居者様です。施設内を歩いて回ることがあり、過去に日中、職員が気付かないうちに離設したことがありました。近隣住民に保護され、無事でしたが、離設の再発防止が課題となりました。また、夜間には衣類を脱いだり、何度も着替えたりした後に失禁することがみられていました。夜間には歩き回る様子はありませんでした。これまでは、離設に対しては施錠や見守り、夜間の脱衣・失禁にたいしては更衣や清掃など、行動が起きた後の対応が中心となっていましたが、本人が何を求め、何を伝えようとしているのかを考える必要があると感じた。
（倫理的配慮）
調査対象およびその家族に対して、調査の目的、方法、個人情報の取り扱いについて説明し、同意を得た。
（具体的な取り組み）
はじめに、対象者の生活歴、性格、これまでの生活習慣、日中の過ごし方、本人が得意としてきたことや好みについて情報を収集した。あわせて、睡眠、排泄、皮膚状態、服薬、環境など、夜間の脱衣・失禁に関係する可能性のある情報を整理した。
日中については、脱衣がみられた時刻、様子、皮膚の乾燥、室温や職員の対応などを記録しました。
得られた情報を職員間で共有し、カンファレンスを実施しました。パーソン・センタード・ケアの視点から、認知症だけでなく、性格、生活環境、他者との関係などを含めて行動の背景を検討しました。日中は本人の生活歴や現在できることを踏まえ、無理なく取り組める活動や役割を検討した。職員が一方的に、決めつけない様に注意しました。
（活動の成果と評価）
本取り組みは開始段階であり、現時点では脱衣、失禁が減少したと言える十分な結果は得られていません。離設については発生しておりません。
離設防止については、施錠や見守りだけでなく、本人が日中に何を求め、どこへ行こうとしているのかを把握することが重要であると考えました。本人が自分の意思や能力を表現できる活かした役割があることで、本人が自分の意思や力を表現できる機会をつくるという支援の方向性が決まりました。
夜間の脱衣・失禁は、認知症だけを原因とせず、かゆみ、暑さ、発汗、衣類やパットの不快感を職員間で共有することが出来ました。
（今後の課題・考察・まとめ）
対象者の行動には、認知症による理解力や判断力の低下だけでなく、身体的不快感、生活習慣、日中の過ごし方などいろいろな要因が関係している可能性があります。一つの原因に決めつけず、観察と記録を継続していく事が大事だと考えます。夜間のかゆみに関しては、記録した内容を医師や看護師に報告し、薬や皮膚状態について相談することも必要です。また、離設防止を優先するあまり、本人の行動を過度に制限せずに、尊厳や本人の意思を尊重しながら、ケアを行い、本人の行動の意味や思いを理解しようとする姿勢が重要だと感じました。今後は、日中に本人が安心して取り組める活動や役割を実施していき、行動の変化を評価していき、夜間に関しても、引き続き観察を続け、対応後の変化を記録し、効果的なケアを検討していきます。単に制止するだけでなく、その人の背景を探りながら、本人の役割と尊厳を大切にした個別ケアを継続していきたいです。

（参考・文献など）
1. 認知症介護実践者研修　標準テキスト
2. 認知症の看護・介護に役立つ　よくわかるパーソン・センタード・ケア

演題番号
Ｅ－⑧

『あれ・これ・それ』で話される方との関わり方

～指示語の奥にある想いを理解する支援～

◆キーワード
1　グループホームケア
2　自立支援
3　自己決定支援

兵庫県・明石市　グループホームふれあい大久保南（おおくぼみなみ）

発表者：管理者・長谷川（はせがわ）　毅（つよし）　　共同研究者：　郭（かく）　英基（ひでき）

令和５年９月開設　２ユニット　定員 18 名	認知症対応型共同生活介護

（取り組んだ課題・はじめに）
　グループホームでは、入居者様が「あれ・これ・それ」といった指示語を用いて意思を伝えようとする場面が少なくない。認知機能の低下や言語機能の変化、あるいは長年のコミュニケーションスタイルなど、その背景は様々であるが、介護士がその意図を十分に理解出来ず、意思疎通が困難となることがある。その結果、入居者様は「伝わらない」というもどかしさを感じ、介護士も対応に苦慮するなど、双方にストレスが生じるケースがある。
　一方で、指示語だけに着目すると「何を言いたいのか分からない」という支援になりやすいが、生活歴や日々の生活場面、表情や視線、しぐさなどの非言語的な情報を含めて捉えることで、本人様の思いをより深く理解できる可能性がある。
　本事例では、指示語による表現が中心であった入居者様への支援を振り返り、本人の意思や思いをどのように理解し、職員間で共有しながら支援に繋げていけるように実践した。また、その実践を通して、入居者様主体のコミュニケーション支援に必要な視点や、グループホームにおけるより良い意思疎通のあり方について考察することを目的とした。
（倫理的配慮）
　今回の発表にあたり、ご家族様に取り組み内容を説明し、本研究以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し回答をもって同意を得ています。
（具体的な取り組み）
対象者：Ａ様　90 歳　女性　要介護１
ADL：食事自立。排泄、入浴、更衣、整容一部介助。
認知症症状：記憶障害、見当識障害、理解・判断力低下、実行機能障害、失語
性格：基本的には穏やかであるが、感情の起伏が激しく、急に怒ったり、泣いたりされることがある。
生活歴：70 歳まで高校の家庭科の教師をされていた。ご主人様を若くに亡くされてから、女手一つで２人のお子様を育てられた。趣味は野球観戦。
　支援にあたっては、「本人様には伝えたい思いがある」という視点を共有した。具体的には、①生活歴や日課、本人がよく話題にする内容を把握する、②表情・視線・指差し・周囲の状況から非言語的な情報を手がかりにする、③複数の選択肢を提示しながら本人の意思を確認する、④職員間で本人特有の表現や関わり方を共有する、⑤言語カードを使用しゲーム感覚で言語化トレーニングを行う、⑥毎朝、詩の朗読を 10 分間行うという支援を継続して行った。
評価方法：取り組み開始前と後で職員に対しアンケートの記入を実施。また、カルテから感情の変化を抜粋し変化があるのか数値化。
（活動の成果と評価）
　言語化トレーニングや詩の朗読を行うことで、かえって混乱してしまい精神的に不安定になることもあったが、その他の取り組みの成果として職員が本人の意図を推測出来る場面が増え、意思疎通が円滑になった。また本人様が安心して思いを表現出来る機会が増え、伝わらないことによる不安や苛立ちも減少した。また、職員間で支援方法を共有することで、誰が対応しても一定の関わりが出来るようになり、支援の質の向上にも繋がった。
（今後の課題・考察・まとめ）
　「あれ・これ・それ」といった指示語は、「伝えたい」という意思の表れであることを改めて認識した。指示語だけに着目すると「何を伝えたいのか理解できない」と捉えてしまうが生活歴や場面、表情などの非言語的情報を合わせて理解することで、本人様の想いに近づくことが出来た。また、意思疎通が円滑になった要因は、特定の職員の経験や技術だけではなく、「本人様を理解しようとする姿勢」を職員間で共有出来たことが考えられる。入居者様の表現をチーム全体で共有し、一人の気付きを組織の知識として積み重ねていくことは、支援の継続性や介護の質の向上に繋がると考える。最後に、本事例を通して本当に必要だったのは「言葉を聞く力」ではなく、「生活全体から意味を考える力」であったと考える。
（参考・文献など）なし

演題番号
Ｅ－⑨

なんも変わっとらん。だいじょうびぃ～

本来の優しさ・魅力を引き出したい

◆キーワード
1　グループホームケア
2　パーソン・センター
ド・ケア
3　自立支援

広島県・府中町　　ふちゅうみどりえん
グループホーム府中みどり園

はまもと　かな
発表者：介護職　濱本　佳奈

いなば　　そういちろう
共同研究者：　伊名波　宗一郎

広島県安芸郡府中町にあるグループホーム府中みどり園	平成 23 年 4 月開設。4 階建ての建物の中に地域密着デイサービス・ショートステイ・特養・グループホームがあり、近隣に小規模多機能ホームがある。

（取り組んだ課題・はじめに）
グループホーム府中みどり園は平成 23 年 4 月にオープンした。開設当初より、利用者様と地域との繋がりに重きをおいてきた。みどり園には様々な委員会があり、その一つに目標・課題を決め１人の利用者様を１年かけて関わっていく個別プロジェクトがある。
今回は約 3 年前に入居された現在 86 歳の男性 T 様。[日々努力と社会貢献、人とのご縁と輪を大切にする]が人生のモットー。幼少期から家族、仲間想いでご自身の事は二の次。不安定になりがちな入居当初は思いつめた顔で廊下をよく行き来され、居室で過ごされる事が多く、思いつめた表情をされ、口数も少なかった。夕方になると県外におられる娘様に「電話がしたい！」「うちのが（奥様）おらんくなった！」と険しい顔で言われる事が多かった。そんな時、個別プロジェクト委員会に属する事になり、対象者様をあえて T 様に絞りどういった関わりで T 様の心の安定、本来の魅力を引き出していくかの過程について発表する。

（倫理的配慮）
本発表に関しては家族様に対し発表の目的や内容について説明し了承を得た。また個人情報の取り扱いに十分配慮した。

（具体的な取り組み）
T 様と 2 人で話す機会をたくさん設け、それらをベースに家族様への質問リストを作成し T 様のバックグランドを調べた。それを基に不安定になりがちな夕方前に二人でパターゴルフを始め徐々に周りの人を巻き込み T 様にレッスンしていただいた。その後は居室で二人でゆっくり話をし奥様の状況を説明した。悲しい表情されるが、納得されその後とても饒舌になられる。釣りをされていたとのことで、釣りぼりにお連れする。行きしは不機嫌だったが、帰りの道の駅では終始笑顔で娘様にお土産まで選ばれた。奥様の地元四国へも行った。思い出の土地や好きそうな場所へ何度もお連れした。徐々に夕方の訴えが減り、笑顔が増えてきたかの様に感じられたある日思いつめた顔で廊下を行き来されている T 様に「大丈夫ですよ！大丈夫！だいじょうびぃ～！」と冗談交じりにお伝えすると笑顔になられた。その後 T 様が「大丈夫よ。だいじょうびぃ～。」と心配事されている入居者様に言われていた。今までの関りで私の言葉が T 様の中に残っていると思えた。

（活動の成果と評価）
先日娘様から、「最近父から電話が来なくなったんですよね。安心しました。ある意味寂しいですね」という言葉をいただいた。以前は奥様の話になると「どうなっとんや！わしは知らん！」と興奮されていたのが、現在は「そうか・・あんたがそう言うんならの」と受け入れてくださる。「やっぱりあんたじゃないとダメじゃの、一流じゃ！」と笑顔で言われ少しづつだが心の安定のお助けが出来てきてると感じられた。そして今ではこちらから娘様にお電話をさせていただきお話されている。

（今後の課題・考察・まとめ）
最近は自信無さそうな顔で「分からんくなった･･･」と言われる事が多くなってきた。その不安を少しでも取り除けるようスタッフ間で対応方法を私から発信で随時シェアをする。自分の事は二の次、与えるより与えたい T 様の性格を活かし他者の為にご本人様が無理なく出来ることを日々一緒に模索し自信をもっていただく。そして T 様の 86 年の歴史をご本人様、家族様から今後もお伺いし今後の関わりに活かしていく。

演題番号
Ｅ－⑩

自分の足でもう一度歩きたい

～願いを叶える自立支援～

◆キーワード
1　自立支援
2　意欲向上
3　自己実現

滋賀県・長浜市　グループホーム　まんてん塩津（しおつ）

発表者：堀（ほり）　真也（まさや）

共同研究者：　まんてん塩津（しおつ）　職員一同（しょくいんいちどう）

平成 17 年 4 月 1 日開所 平成 24 年 6 月増設　2 ユニット　定員 18 名	運営理念：のんびり　ゆったり　ほがらかに。 いつまでも自分らしい生活のお手伝い。

（取り組んだ課題・はじめに）

対象者 A 様(取り組み当時　80 歳､男性､要介護 3)。自身の仕事に対して、誇りを持って勤めてこられた。意志の強い性格であり、納得が行かないと激昂される事も有る。

令和 6 年 8 月に入居された当初、右手の骨折はあったものの歩行は可能であった。しかし、同年 12 月頃より腰痛が悪化し、歩行時のバランスが崩れやすくなった。

職員側が「転倒リスク」や「支える不安」から、リスク回避を優先して歩行介助を控え、車いす移動を増やした結果、令和 7 年 2 月には移動方法が完全に車いすへ移行してしまった。

これに伴い、A 様は「もう歩けないな・・・」「腰が痛いから部屋に帰る」といった悲観的な発言が増え、以前は楽しみにしていた散歩も拒否するなど、無気力な状態に陥っていった。

この状況を受け、職員はリスク回避優先のケアを反省し、ご本人の思いや希望を引き出し、失った意欲を取り戻すための自立支援に取り組むこととした。

（倫理的配慮）

本報告にあたり、ご本人およびご家族に対し、個人情報の取り扱いおよび発表の趣旨について十分に説明を行い、書面にて同意を得ている。

（具体的な取り組み）

まず職員間でミーティングを行い、ご本人の思いをリサーチした。その結果、関係性の深い職員に対し「自分の足で歩けたら気持ちええやろな」と思いを打ち明けていた事が判明した。

そこで、主治医に確認し歩行の許可を得た上で、以下の 3 つの取り組みを行う事とした。

1. 痛みの緩和と精神的サポート： 主治医と連携して服薬タイミングを見直し、服用時に「これで痛みが取れますよ」と前向きな声掛けを徹底した

2. 意欲向上： 昔の仕事や行きたい場所について語り合い、活気ある記憶を呼び戻した。「もう一度できますよ、一緒にやりましょう」と、会話を常にポジティブに締めくくるよう意識した。

3. 段階的な歩行訓練： 恐怖心の強い立ち上がりや方向転換に対し、「体を支えるので大丈夫ですよ」と安心感を提供した。まずは自席からソファーまでの 3m 移動をティータイム時に毎日継続し、成功体験を積み重ねた。

（活動の成果と評価）

精神面では、1 ヶ月を過ぎる頃から「外に出られてありがたい」と前向きな発言が増え、以前のような怒りや攻撃的な動作はほとんど見られなくなった。

身体面では、トイレでの立位・方向転換が自立に近づき、全職員が不安なく介助できるようになったことで、歩行機会がさらに増加した。

ティータイムの移動から始まった取り組みは、ユニット間歩行へと距離が延び､令和 7 年 8 月には「参道まで歩く」という目標を達成した。その際、A 様は満面の笑顔で「気持ちいいわ」と話され、強い自信を取り戻された。

（今後の課題・考察・まとめ）

ご本人の「腰が痛い」という言葉や身体の状態を見て、「歩くのは辛いだろう」「転倒の危険がある」「安全が一番大事」と、職員側の主観で決めつけていた。

このリスク回避を優先した「決めつけ」こそが、ご本人の「自分の足で歩きたい」という真の願いを覆い隠し、結果として本人のやる気や希望、可能性を奪っていた。

表面的な状況で職員が限界を決めつけるのではなく、その裏にある思いを捉え、ご本人と一緒に目標を設定しつつ自立支援を行う事が、ADL の向上や思いの達成において重要な要素だと考えている。

たとえ心身の状態が変化しても、ご本人の可能性を信じて最期まで思いに寄り添い、例えわずかな期間でも自立支援を通して自己実現を果たせるよう、今後も研鑽を重ね、新たな成果へと繋げていきたい。

（参考・文献など）

演題番号
Ｅ－⑪

腸活でチョー良い暮らし

～チームワークと根拠ある介護の実践～

◆キーワード
1　医療連携
2　根拠ある実践
3　統一されたケア

茨城県・筑西市　グループホームよつ葉（よつば）

発表者：施設長・塚田（つかだ）　みゆき　　共同研究者：　職員一同

看護師、訪問看護師との連携により健康管理は行っているが、介護士の医療的知識や視点が養われていかない現状、「便秘」を通して、暮らしや医療面の関わりを見直していきたいと考えた。	平成 25 年 6 月開設 認知症対応型共同生活介護 2 ユニット 18 名 よつ葉では、『彩りのある生活』をコンセプトに、「役割」「つながり」「個別性」を大切にしています。

（取り組んだ課題・はじめに）

入居者の長期利用に伴って、認知症の進行や活動量・食欲の低下等を背景に、便秘症状を抱える入居者が増加していたが、介護施設において日常的な下剤の使用が当然の対応として行われている事への疑問から取り組みを始めた。また、特に、食欲が低下している入居者から「薬でお腹がいっぱいになってしまう」という訴えもあり、服薬を原因とする身体的・心理的負担の軽減が必要であると考えた。そこで、私たちは日常の生活リズムを整えることで、下剤をはじめとした内服薬を減らすことに繋げたいと考えた。そのため、本取り組みでは、単に腸内環境を整えることだけではなく、生活意欲や自然な活動性の向上につなげることを目指した。

（倫理的配慮）

発表にあたっては、個人が特定されるような氏名等の個人情報は使用せず。内容についてはプライバシー保護に留意した。また、取り組みは、事前に家族への説明と同意を得た 14 名に対し、本人の意思や体調を尊重し、無理のない範囲で実施した。

（具体的な取り組み）

事前調査にて、職員間で便秘に対する理解や支援方法に差があることが分かり、まずは知識向上と意識の統一を目的とした勉強会を実施し、モニタリング方法、支援方法を構築した計画を立て実施(9ヶ月)。

・スタッフの知識と意識の向上のための勉強会
・食事内容の見直し（水分摂取とみそ汁の具調整）
・腸活体操の導入（継続の習慣化）
・排便状況評価の統一（スケール作成）
・排便状況や体調変化の共有（記録、定期カンファ）
・下剤使用状況の見直し（薬剤師との情報共有）
・トイレ内のポスター掲示（入居者からの申告）
・リラックスして過ごせる雰囲気づくり（会話、家族との面会）
・日常活動量の増加（運動、日光浴、散歩、家事）

（活動の成果と評価）

・事例（A 様）

自己摘便行為が見られ、排便は月 10 回程度であった。便の性状や摘便状況を主治医と相談し、内服薬の種類・量を事細かく相談、実施期間（9 か月）で延べ 12 回内服調整を行ったところ、1 か月の排便回数が 10 回から 23 回へ増回（令和 8 年 3 月時点）。現在（令和 8 年 5 月時点）は、30 回とほぼ毎日になった。

排便状況は、入居者によって差はあるものの、全体での 1 か月の排便回数 216 回が 249 回と大幅に増えた。さらに居室で過ごす時間が多かった入居者様が、共有スペースで運動を心待ちにするようになったり、入居者様同士の交流が増えた事で笑顔も多く見られるようになった。スタッフについては、健康管理に対する意識が高まり、医師や薬剤師との情報交換も積極的に行えるようになっただけでなく、「便秘」という事象を通し、身体の構造や反応、生活全体を捉え、支援するコミュニケーションが増えた。

（今後の課題・考察・まとめ）

腸活は継続した関わり必要であった。入居者ごとに体質や生活歴、好みが異なるため、個別性を重視した支援の必要性を再認識できた一方で、知識や観察力、経験値を補い合いながら支援していく難しさも痛感した。また、医師や薬剤師など医療関係者との連携が、入居者の暮らしを支える上で重要だが、日ごろから介護士からは苦手意識が強く見られていた。この取り組みを通して、多職種連携が強化できただけでなく、専門性の向上による自信とやりがいに繋がったという点も大きな学びとなった。今後も、グループホームだからこそできる”暮らしに寄り添う支援“を、日常生活の中から継続していきたい。

演題番号
Ｅ－⑫

一人一人に寄り添い、その人らしい時間を共に

～やりがい・生きがいをもち、最期まで自分らしい暮らしを支える～

◆キーワード
1　その人らしさ
2　やりがい・生きがい
3　看取り・ｸﾞﾘｰﾌｹｱ

宮城県・登米市

有限会社みんなの家 グループホームみんなの家錦織（いえにしきおり）

発表者：管理者　岩渕（いわぶち）　明菜（あきな）

共同研究者：錦織事業所長　村田顕弘（むらたあきひろ）　職員一同

有限会社みんなの家錦織事業所 グループホームみんなの家錦織 平成 24 年 7 月開所　（1 ユニット／定員 9 名）	通いから一時的な泊り、そして終の棲家へと、認知症の方が住み慣れた場所で最期まで自分らしく、を基本理念としている。

（取り組み課題）

地域では高齢者夫婦世帯や独居高齢者が増加している一方、「高齢者は家族が面倒を見るもの」という考え方が依然として根強く、家族は介護負担や施設入居への後ろめたさを抱えていることが少なくない。そこで私たちは、施設が単なる生活の場ではなく、「入居して良かった」と本人も家族も誇りを持って言える場所であることを目指した。認知症になっても住み慣れた地域で、その人らしく暮らし続け、最期まで尊厳ある人生を送るための支援について実践した。

（倫理的配慮）

発表にあたり、個人が特定されないよう氏名等は匿名化し、内容についてはご家族の同意を得た。また、個人情報保護に十分配慮した。

（具体的取り組み）

私たちは入居者一人一人の人生歴や得意なこと、好きなことを把握し、その人らしさを発揮できる環境づくりに取り組んだ。

・A 子さんは元小学校教員で、人前で歌うことや人をまとめることが得意であった。誕生会では得意の「黒田節」を披露し、書初めでは先生役として活躍された。また、空き家となった自宅を気に掛けていたため、面会時には家族と共に自宅を訪問する機会を設けた。

・B 子さんは日本舞踊の師範であり、お祝い行事では着物姿で「さんさしぐれ」などを披露された。職員による余興の際には振り付け指導も行い、長年培った技術を生かしていただいた。また、自宅の清掃や庭の手入れを継続できるよう支援した。

・C 郎さんは絵画や散歩、山菜採りを好み、施設で描いた作品を文化祭で個展として展示した。地域広報紙の配布活動にも積極的に参加し、地域とのつながりを保ちながら生活された。

その他にも、裁縫が得意な方にはミシンを使用した作業を、元運転手の方には家具修理等をお願いするなど、それぞれが役割を持ち活躍できる場面を創出した。また、誕生日には希望する食事や外食を取り入れ、その人らしい時間を大切にした。

看取りにおいては、家族が最期まで共に過ごせるよう宿泊や食事、入浴等を支援し、逝去後は思い出の写真をまとめた映像作成や祭壇設置、弔電などを通じて丁寧なお見送りを行った。

（活動の成果と評価）

開設当初から個性豊かな入居者が集まり、互いに役割を持ちながら活気あふれる生活環境を築くことができた。職員は入居者の人生や価値観を深く理解し、できることを継続していただく支援を実践することで、ケアの質の向上につながった。

また、「支援する側・される側」という関係性だけでなく、職員が教わる場面も増え、互いに尊重し合う関係が形成された。行事やレクリエーションを一緒に企画する機会も増え、笑顔や笑い声が絶えない家庭的な雰囲気が生まれた。

家族の面会や外出も活発となり、「施設というより大きな家で共同生活をしているようだ」との声も聞かれた。看取り後には、ご家族が火葬前に施設へ立ち寄り、共に生活した入居者や職員へ最後の別れを告げることが恒例となっている。これは本人・家族・職員が共に歩んだ時間への信頼と感謝の表れであり、私たちにとっても大きな励みとなっている。

（今後の課題）

コロナ禍をきっかけとした生活上の制限は現在も一部継続しているが、「生かされる」のではなく「生きる」を実感できる生活を支援するためには、その人らしい暮らしを制限し過ぎてはならない。安全と生活の質の両立を図りながら、以前のような地域との交流や外出機会を再構築していく必要がある。

また、看取り後の家族との関係づくりも課題である。定期的な広報や家族会などを通してつながりを継続し、「ここで幸せな時間を過ごせた」という思い出を共有できる場を設けることで、本人と家族、そして地域を結ぶグループホームの存在意義をさらに高めていきたい。

演題番号
Ｅ－⑬

緊急ショートステイから学んだレスパイトケア

～南風でできることを考えてみた～

◆キーワード
1　緊急ショート
2　レスパイトケア
3　職員のモチベーション

東京都八王子市

にんちしょうぐるーぷほーむみなみかぜ
認知症グループホーム南風

かんりしゃ　おかだ　ともか
発表者：管理者　岡田　朋香

なのはなゆにっといちどう
共同研究者：　菜の花ユニット一同

施設概要：2022 年 3 月 1 日開設。同年 10 月より認知症高齢者介護家族の体調不良・急な冠婚葬祭時、レスパイトケア目的など様々な緊急時に安心して利用できる施設となるよう、地域のニーズに対応するために緊急ショートステイを開始した。	施設説明：2 ユニット 18 名が居住している。 実施サービス説明：緊急ショートは各ユニット 1 名/日、月内で最長 14 日間利用できる。

（取り組んだ課題・はじめに）

A さんはやや神経質なところがあり、デイサービスやヘルパー利用の介入がなかなかできずにいた。

主介護者であるご家族(長女)の入院のため緊急ショート 5 日間の利用であった。契約時、送迎時の会話からご家族が疲弊している状況を知り、ケアマネジャーに情報共有をしながらレスパイトケア目的での気軽な緊急ショート利用を勧めていった。

（倫理的配慮）

今回の発表に際し緊急ショートステイを利用された A さん、ご家族に説明文書を用いて発表の趣旨説明をし、同意書に署名をいただき承諾を得た。

緊急ショートの受け入れをしたユニット職員と上長にも趣旨説明をして同意、承諾をえた。

（具体的な取り組み）

・A さんの認知症の進行や ADL 低下から介護量が増え疲弊があっても自宅で介護を続けたい家族の想いや A さん本人、家族の状況を知るため毎月ケアマネジャーの訪問後に情報共有をいただいた。

・A さんのご自宅近くを通った際は関係性構築のため、声をかけ顔を合わせるようにした。

・緊急ショート利用時は A さんの情報を職員に細かく聴き、できるだけ一緒に過ごす時間を作り管理者である私がアセスメントをして自宅でも行えそうな介助や声かけを家族とケアマネに伝えた。

・A さんの快、不快を知るためにユニット職員と様々な対応や活動を試し A さんが心地よく過ごせる介助や活動、声かけを検証した。

・家族が心配されていた A さんの行動や食事の様子も安心していただけるように利用中の様子、活動を写真を使用した連絡帳と共に家族に細かに報告するようにした。

（活動の成果と評価）

・A さんが南風で過ごすことに慣れ、職員と笑顔多く接する姿をみて家族、ケアマネが安心して緊急ショートを利用できるようになった。現在は月に数日の利用

・A さん家族が訪問介護サービスの利用を躊躇せずに利用できるようになった。

・南風の職員が自宅で認知症介護をしている家族の気持ちや状況を深く知ることができ、緊急ショートステイを行う意義を職員が改めて考えることができた。

・A さんのアセスメントを進めていく中で職員間の利用者をみつめる時間が増え、アセスメント項目のポイントが絞られすぐに答えられるようになった。

・利用者本人、家族、ケアマネから感謝の言葉を聴くことができ、職員のモチベーションアップにつながった。

（今後の課題・考察・まとめ）

【今後の課題】「緊急」の利用であり、利用者の情報が少ない中で様々な利用者・家族と関わりを持つため、介助や対応が困難な場面が必ずある。職員のモチベーションを維持できるよう良い評価を感じられる場面作りをしていきたい。

【考察】利用者を知ること、家族を知ること、アセスメントをして職員と共有し結果を検証することでレスパイトケアをすることができ、介護をする上で様々な事項に繋がっている。

【まとめ】今後も南風の緊急ショートの受け入れにより、地域に住む認知症家族のレスパイトケアが行えるよう職員全員で取り組んでいく。

（参考・文献など）なし

演題番号
Ｅ－⑭

穏やかな暮らしを支える『役割』

洗濯物たたみという仕事との出逢い

◆キーワード
1　グループホームケア
2　自己決定支援
3　役割

北海道　札幌市

ぐるーぷほーむ　はーとはうすもいわした
グループホーム　ハートハウスもいわした

たなか　けんいち
発表者：介護士・田中　賢一

ささむら　よし
共同研究者：　笹村　佳

愛全会では札幌市内 10 事業所 19 ユニットのグループホームの他、愛全病院を始め訪問診療クリニック、介護老人保健施設、特別養護老人ホーム、ケアハウス、サービス付き高齢者向け住宅等の運営を行っている。	札幌市南区にある 2 ユニットのグループホームで 1 階にある多目的室では、オレンジカフェや音楽会、運営推進会議などを開催している。1 階には重度化しても入浴していただけるようにリフト浴が完備され、2 階のテラスでは、毎年 2 ユニット合同の夏祭りを開催している。

（取り組んだ課題・はじめに）

夜間頻尿による睡眠不足や日中の落ち着きのなさ、入浴への強い希望、支払いへの不安など、複数の課題を抱えていた入居者。私たちは認知症の症状だけに着目するのではなく、本人の思いや生活歴、価値観を尊重した支援を行った。本人が『役割』を持って安心した生活が送れるようになったため報告する。

（倫理的配慮）

本発表は、ご家族へ趣旨を説明し同意を得て実施した。なお、個人が特定されないよう匿名化し、個人情報およびプライバシーの保護に十分配慮した。

（具体的な取り組み）

【事例紹介】

90 代女性、要介護 4、アルツハイマー型認知症、障害高齢者自立度：B2、認知症高齢者自立度：Ⅲa、難聴でお話し好き、お世話好き、頑固な性格である。

まず夜間の頻尿による睡眠不足と転倒リスクについては夜間は 1～2 時間おき、多い時には 1 時間に 3 回トイレへ行っていた。そのため十分な睡眠がとれず、立位も不安定で転倒の危険性が高い状態であった。そこで医師に相談し、頻尿や睡眠に関する薬剤調整の依頼をした。また、夜間は居室にポータブルトイレを設置し、安全に排泄できる環境を整えた。

日中は、車椅子で居室とリビングを繰り返し行き来し、落ち着かない様子が見られていた。本人のできることや好きなことに着目し、『役割』を持っていただくことが大切ではないかと考え、洗濯物たたみをお願いし、職員と会話を楽しみながら一緒に取り組む時間を設けた。

また、多くの不安と固執はあったが、特に訴えの多かった以下の 3 点について職員間で対応を統一した。

本人はお風呂が好きで、入浴した後も「まだ入っていない」と訴えられることがあった。私たちはその訴えを否定せず、「入りたい」という思いを受け止めることを大切にし、ドライシャンプーとドライヤーで整髪をすることにした。

支払いへの不安に対しては、「娘様に伝えておきますね」という統一した声かけを職員全員で行った。

コーヒーや飴へのこだわりに対しては、まず「飲みたい」「食べたい」という思いを受け止めることを大切にし、ご家族にも協力していただき、ノンカフェインコーヒーやラムネを準備していただいた。

（活動の成果と評価）

一連の取り組みにより、夜間の頻尿による睡眠不足については減少し、十分な睡眠が確保できるようになった。その結果、日中はリビングで笑顔で過ごす時間が増え、生活のリズムが整うようになった。

また、洗濯物たたみは単なる作業ではなく、会話を楽しみながら一緒に取り組み、感謝される経験を重ねることで、自信や「ここにいていい」という安心感につながり、『自分の役割』として定着した。この『自分の役割』が、本人の穏やかな暮らしにつながった大きな要因であったと考える。

また、入浴への希望についても否定するのではなく、「入りたい」という思いを受け止め、ドライシャンプーやドライヤーでの整髪を取り入れることで安心感につながった。

支払いへの不安に対しては「娘様に伝えておきますね」という統一した声かけを行った。同じ言葉をかけることで不安が軽減し、納得される場面が増えていった。

コーヒーや飴へのこだわりに対しても否定せず、希望時に提供することで安心して過ごせる時間が増え、満足感につながったと考える。

その結果、本人のできることや思いに着目した支援が穏やかな暮らしにつながったと考える。

（今後の課題・考察・まとめ）

今回の実践を通して、認知症の症状だけを見るのではく、本人の思いやその人らしさを尊重する重要性を改めて実感した。また、『できること』や『役割』に着目した支援は、自信や安心感を与え、穏やかな暮らしにつながることを学んだ。今後も、一人ひとりが『役割』を持ち、その人らしく穏やかに暮らせる支援を実践していきたいと考える。

演題番号
Ｅ－⑮

◆キーワード
1　認知症ケア
2　自立支援

認知症との関わりから笑顔を引き出す

その人らしさを大切にしたケアの実践

大阪府・大阪市旭区　グループホームらんまん高殿（たかどの）

発表者：坂下（さかした）　瞳（ひとみ）

共同研究者：グループホームらんまん高殿職員（たかどのしょくいん）

認知症対応型共同生活介護 令和４年５月１日　開所 ３ユニット　定員 27 名	運営理念：のんびり　ゆったり　ほがらかに。 いつまでも自分らしい生活のお手伝い。

（取り組んだ課題・はじめに）

認知症の人は、不安や混乱から様々な行動や言動がみられる。しかし、その一つひとつの行動や言動には、本人なりの理由や思いがあると考えられる。当施設では、「施設が家」、すなわち「安心して暮らせる場所」と感じていただくことを目標に、自立支援を意識したケアを実践している。その人らしい生活を継続できるよう支援を行った結果、笑顔や意欲の向上がみられ、表情にも大きな変化が現れた。本発表では、認知症の人の「その人らしさ」を大切にした関わりを通して、安心して暮らせる環境づくりを実践し、笑顔を引き出すことができた事例を報告する。A 様は入居当初、表情が乏しく、不安から帰宅願望や大声を出す行動、他利用者の居室へ入室する行動、空腹の訴えなど、認知症に伴う行動・心理症状（BPSD）がみられた。そのため、A 様が安心して生活できる環境づくりが必要であると考え、本事例に取り組んだ。

（倫理的配慮）

本取り組みについては、本人、家族および施設責任者より承諾を得た。

（具体的な取り組み）

A 様は人の役に立つことを喜ばれる性格であったため、本人が活躍できる役割づくりを行った。料理の盛り付けや取り分けを依頼したところ、当初は見学されることが多かったが、継続してお願いする中で、「ここが少ない？」と助言されたり、自らスプーンを持って取り分けを行われたりするようになった。活動後には、「ありがとう」「助かりました」と感謝の気持ちを必ず伝え、役割への達成感や自己有用感を感じていただけるよう支援した。また、不安の軽減を目的として、空腹の訴えに対しては否定せず受け止め、食事の味見やおやつを提供した。空腹感を満たすだけでなく、「ここにいれば安心できる」という気持ちにつながるよう継続して関わった。さらに、地域の認知症専門医である松本一生医師と密に連携し、施設での生活状況や精神状態を共有しながら、その都度内服調整を行った。介護と医療の双方から支援を行うことで、安心して生活できる環境づくりに努めた。

（活動の成果と評価）

役割を継続して依頼したことで、A 様は自ら料理に参加される場面が増え、活動後には笑顔で「ええよ」と返答されるなど、意欲や表情の変化がみられるようになった。また、他利用者へ笑顔で声を掛けられる場面も増え、交流の機会が広がった。空腹の訴えに対しても、味見やおやつを取り入れた関わりを継続したことで、不安が軽減し、穏やかに過ごされる時間が増加した。さらに、認知症専門医との連携による内服調整も相まって精神状態が安定し、帰宅願望や他利用者の居室へ入室する行動は大きく減少した。他居室へ向かわれる際には「かばんを探している」と話されることがあったが、自室へ案内すると「ここは我が家だよ」と話されるようになり、自室を安心できる場所として認識されている様子がうかがえた。

その結果、他利用者とのトラブルは大幅に減少し、笑顔で談笑される場面が増えた。A 様にとって施設が「安心して暮らせる家」となり、その人らしい生活につながったものと考える。

（今後の課題・考察・まとめ）

認知症が進行しても、その人がこれまで大切にしてきた価値観や役割への思いは失われないと考える。できないことに目を向けるのではなく、できることや得意なことに着目し、その人らしく役割を持っていただくこと、不安な気持ちに寄り添うこと、さらに医療と連携した支援を継続することが安心感の獲得につながった。その積み重ねにより、「施設が家」という認識が生まれ、笑顔や意欲の向上、BPSD の軽減につながったと考える。今後も自立支援を推進するとともに、グループホームならではの個別性を重視したケアを実践していく。また、一人ひとり異なる認知症の症状や生活歴を理解し、多職種によるチームケアを通して、法人の運営理念である「いつまでもその人らしい生活のお手伝い」を実践できるよう、職員一同努めていく。

演題番号
Ｅ－⑯

ストレスを軽減する環境づくり

～認知症ケアにおける環境整備の大切さ～

◆キーワード
1　環境整備
2　アセスメント
3　負担軽減

埼玉県・川越市

ぐるーぷほむ　その
グループホーム　園

たかぎ　りゅうき
発表者：介護福祉士　髙木　龍輝

くりはら　くるみ
共同研究者：　栗原　くるみ

令和５年開設　定員 18 名（2 ユニット)）小規模多機能型居宅介護が併設。近隣にて同法人グループが特別養護老人ホーム、デイサービスを運営。	「老人にも明日がある」の理念のもと認知症の方が住み慣れた地域で暮らし続けられるように法人全体で支援しています。

（取り組んだ課題・はじめに）
グループホームの居住空間において、介護職員は入居者の日々の生活に最も深く寄り添い、その微細な状態変化を敏感に察知できる立場にある。しかし、現場では認知症に伴う行動・心理症状（BPSD）に対し、対症療法的な「身体介助」や「制止」に終始してしまう傾向があり、それが結果として職員の精神的・身体的負担を増大させているという実態があった。課題に対してチームで取り組んだ認知症ケアや環境整備の結果、入居者の心理状態の安定とそれに伴う職員の介助負担感にどのような相乗効果をもたらすかを検証した。その取り組みと成果について報告する。

（倫理的配慮）

利用者様及びそのご家族に発表の趣旨を説明し、取り組みの報告を行うことと、写真の掲載について承諾を得た。

（具体的な取り組み）
対象者は、不穏や徘徊等の過活動傾向が顕著な入居者２名（A 様：93 歳女性、B 様：86 歳男性）を選定した。介入期間は１ヶ月間とし、以下の「観察・共有→評価→対策検討→環境調整」のサイクルを回した。
①　【評価指標の導入】　客観的な指標として、BPSD 評価尺度『BPSD+Q/BPSD25Q』を活用した。
②　【職員間の「気づき」の共有と分析】　日々のカンファレンスや申し送りにおいて、入居者が「いつ、どこで、どのような刺激に対して」反応しているかを徹底的に観察し、記録した。
③　【A 様への具体的な環境調整】（視覚と身体不快感へのアプローチ）　A 様は夕刻に送迎車が見えることで「帰宅願望」による不穏や強い不安感を抱いていた。これに対し、「小窓のロールスクリーンを閉める」という視覚遮断を実施。また、足の痛みが不穏を助長しているという「気づき」から、「午前中のタッチケア」を実施し不快感の除去を徹底した。
④ B 様への具体的な環境調整（聴覚・視覚の制限とリズムの安定化）　B 様は、特定の言葉に対して混乱や易怒性を示す特性があった。対策として「言葉に出さずに服薬介助を行う」という聴覚刺激の制限を行った。さらに、不穏時にはあえて「職員が視界から消える」ことで過剰な視覚刺激を避け、午後は居室での休息をルーチン化し、生活リズムの安定を図った。

（活動の成果と評価）
①　【定量的成果：BPSD の劇的な改善】
A 様の変化：最も課題であった「徘徊」「不穏」の数値が明確に減少し、連動して「介護への抵抗」や「不潔行為」も解消された。
B 様の変化：激しい「暴言」や「易怒性」が目に見えて減少し、生活環境が穏やかになった。一方で「傾眠傾向」が上昇したため、今後は活動と休息のバランスを再調整する必要があるという課題も明確になった。
②　定性的成果：職員の意識変容と負担感の解消　A 様に関する職員の「負担度」は、介入後にほぼ解消される結果となった。これは「適切な環境調整がいかに現場のストレスを無力化できるか」を証明するものである。

（今後の課題・考察・まとめ）
身体介助を中心とした従来のケアだけでは、BPSD の根本的な解決は難しく、視覚、聴覚、感覚といった「見えないケア（環境調整）」こそが、QOL を変える最大の要因であることが分かった。職員アンケートやミーティングを通じて、スタッフが BPSD を「自分たちを困らせる行動」ではなく、「環境の不備を教えてくれる指標」としてポジティブに捉え直すきっかけとなった。今後の課題は、この「気づき」のプロセスをマニュアル化・形式知化し、新人教育にも伝承できる体制を整えることである。我々ケアの専門職は、認知症という状態を正しく理解し、適切な環境を整えることで、いかなる状況下でも穏やかな生活を再構築できるという自信を得ることができた。